

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 24 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24652079

研究課題名(和文) 構造化されたエリシテーションの開発と意味研究への応用

研究課題名(英文) Structured elicitation and its application to semantic research

研究代表者

西村 義樹(Nishimura, Yoshiki)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：20218209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：従来から、言語の統語論的・意味論的分析のためには研究者あるいは研究協力者の内省・直感が用いられてきた。このような研究手法を再検討するため、母語によって異なる事象の捉え方、顕在的態度とは異なる潜在的態度の存在に注目しつつ、特にヴォイス現象とダイクシス現象について従来の研究データを詳細に分析した。その結果に基づき、構造化されたエリシテーションの手法の概要を定め、試行のための準備をおこなった。

研究成果の概要(英文)：Linguistic intuition has been the principal source of information especially for linguists working on syntactic and semantic analyses. It is, however, a well-known fact that intuition may be influenced by various biases. To evaluate the research method depending on linguistic intuition, we have examined the data used in the literature on the topics of voice and deixis. We have also attempted to materialize our findings as the data collection technique "structured elicitation".

研究分野：言語学

キーワード：調査法 言語データ 言語的直感 エリシテーション 意味理解 ヴォイス ダイクシス

1. 研究開始当初の背景

言語現象の文法的・意味論的分析は、当該言語の母語話者である研究者あるいは研究協力者の言語的内省に大きく依存しているのが現状である。一方で、言語コーパスなど、実際の言語使用によって産出された言語資料や、一般の話者による自然な判断を言語データとする研究も、近年増加しつつある。

これら2つの種類の言語データを巡っては主に2つの立場がある。その第1は、「さまざまなノイズを取り除けば両者は本来一致するもの」という立場、その第2は、「ふたつは異なる種類のデータであり、一致することは期待できない」という立場である。第2の立場はさらに、研究者の内省に依存した従来の分析結果をコーパス・データやアンケート調査により修正するという、「コーパス万能主義」、「アンケート万能主義」とでも言うべき立場に至ることもある。

本研究課題は、このような二者択一の捉え方に疑問を持ち、研究者の判断と一般話者の判断の関係を明らかにすることにより、これら2種類のデータを組み合わせ、より実用的・現実的な研究手法(構造化されたエリシテーション)が可能ではないかとの見通しの下、構想された。

2. 研究の目的

(1) これまでの言語研究、特に構文の意味を扱う研究においては、もっぱら研究者が、みずからの直感や内省判断に基づいて自由に質問をすることにより構成されるエリシテーションが活用されてきた。しかし、この方法は、研究者の持つさまざまな関心の偏り、および研究者の母語・母方言の影響に対して無関心であった。そこで、エリシテーションにおける、こうした研究者に由来する偏りについて、実験などを通じて「一般人の言語的直感」と比較するとともに、発表された論考における偏りを明らかにすることにより、その位置付けを試みる。

(2) 従来から言語調査で広く用いられてきたエリシテーションに、実験的な要素を組み込むことで、研究者に由来する偏りの影響を最小化する、新たなエリシテーションの手法を開発する。

3. 研究の方法

(1) 一般人の言語的直感の特性に関する研究知見をレビューし、整理した上で、意味論上のテーマの中から、実験的手法を導入し一般人の言語的直感を検討する必要があると思われるものについて、いくつかの課題を同定する。

(2) 言語や方言など異なる言語変種に対する態度について、顕在的な態度だけでなく潜在的な態度を明らかにする手法を開発し、両者の違いを明らかにする。

(3) レビューの結果選定した意味論的テーマについて発表された研究を収集し、各研究が主張の根拠としてのデータを整理しデータベース化する。このデータベースを利用して、それぞれの研究者の関心や母語・母方言の違いの影響を明らかにする。また、そのような影響と導かれた結論の間にどのような関係があるかを検討する。

(4) 研究者に由来する偏りを避けながら、研究者にとって関与的なデータが効率よく集められるような質問群を生成する手法を検討する。その結果を「構造化されたエリシテーション」として具体化するとともに、実際に利用することのできるアプリケーションとして実装化する。

4. 研究成果

(1) 20世紀後半以降に発表された、語用論を含むさまざまな意味論上の論考をサーベイし検討した結果、ヴォイス現象としての受動、および、ダイクシス表現については、多数の優れた論考が発表され続けてきたにもかかわらず、未だに研究者の主張の間に意見の一致が見られないことが明らかとなった。

(2) 話者の母方言とは異なる方言に対して、顕在的な態度とともに潜在的態度があること、さらに、それらの2つの態度の間には相違があることを、実験により明らかにした。この結果は、研究者が自身の内省的・直感的な判断を意識し、偏りを修正する方策を講じたとしても、潜在的な態度の影響を回避することができない可能性があることを示したと言える。

(3) ダイクシス表現と話者による周囲の空間の認識の間には、密接な関係があることが従来から主張されてきたが、中国語と日本語のダイクシス表現を比較することにより、中国語話者においては絶対的な指示棒の適用が、日本語においては相対的な指示棒の適用が優勢であることが明らかとなった。異なる母語の話者の間で観察される、このような基本的な空間認知の違いは、エリシテーションにおける研究者の母語の影響の可能性を強く示唆すると考えられる。

(4) 日本語の受動に関する研究をサーベイし、特に重要な貢献をもたらした研究の中から、共通のテーマを扱っていると見なせる11本の著作・論文について、それに含まれる全例文のデータベースを作成した。この例文データベースを利用して、異なる主張ごとに例文データを整理した結果、扱われているテーマが類似しているにもかかわらず、依拠する例文について、著者の間にはかなりの違いがあることが明らかとなった。例えば、今回作成したデータベースは受動文と非受動文の双

方を含むが、その中から受動文(計736例)に使われている動詞の種類をしてみると、もっとも出現頻度の高かった「殺す」(計31例)の場合、黒田(1979)に21例、久野(1983)に2例、柴谷(2000)に2例、寺村(1982)に5例、Jacobsen(1991)に1例と、著書・論文による大きな偏りが見られた。また、「死ぬ」(計21例)の場合は、柴谷(2000)に8例、黒田(1979)に4例、久野(1986)に4例、高見・久野(2002)に3例、寺村(1982)に2例、さらに「降る」(計15例)の場合は、高見・久野(2002)に6例、黒田(1979, 1985)に計3例、寺村(1982)に2例、久野(1983, 1986)に計2例、柴谷(1985, 2000)に計2例と、やはり半数近くの例がひとりの著者によって用いられていることがわかった。

(5) 空間ダイクシスに関するいくつかの主張を選び、それらが基づく内省判断、あるいはエリシテーションによる判断を実験によって確認することができるかどうか検討した。その結果、研究者の内省による判断、およびエリシテーションによる判断が前提とする環境や条件は、実験の中で実体化しようとした場合、十分に具体的でないことが判明した。

(6) 以上の知見に基づき、構造化エリシテーションをおこなうための質問項目を自動で生成するアプリケーションを試作中である。

<引用文献>

- Jacobsen, W.M, Kurocio, The transitive structure of events in Japanese, 1991
久野 暉、大修館書店、新日本文法研究、1983
久野 暉、受身文の意味-黒田説の再批判、日本語学、1986:2、1986、70-87.
黒田 成幸、受身についての久野説を改釈する：一つの反批判、日本語学、1985:4、1986、69
Kuroda, Shige-Yuki、Kenkyu-sha、On Japanese passives. In: G. Bedell et al. (eds.). Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue、305-347
Shibatani, Masayoshi、Passives and related constructions: A prototype analysis、Language、61:4、1985、821-848
柴谷 方良、ヴォイス、日本語の文法 1、2000、119-186
高見 健一・久野 暉、研究社、日英語の自動詞構文：生成文法分析の批判と機能的解析、2002
寺村 秀夫、くろしお出版、日本語のシンタックスと意味、1982

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

木村 英樹、中国語疑問詞の指示特性：“什么”(なに)、“谁”(だれ)、“哪”(どれ)の機能対立、日中言語研究と日本語教育、8、2015、12-23

大高 瑞郁・唐沢 かおり、成人形成期の子どもへの父親に対する態度を規定する要因：父親からの行動に関する子どもの認知に着目して、社会心理学研究、31、2015、89-100

白岩 裕子・唐沢 かおり、量刑判断に対する増進・抑制効果の検討：被害者への同情と裁判に対する規範的なイメージに着目して、感情心理学研究、22: 3、2014、110-117

林 徹、Mixed language in use: A case of Eynu, a Modern Uyghur-based secret language spoken in the south of Taklamakan, Dilbilim Arastirmalari、2014:2、2014、99-115

林 徹・安達 真弓・神庭 真理子、レゴ組み立て課題を通して見る日本語の指示詞コトソ、東京大学言語学論集、34、2013、275-289

渡辺 匠・唐沢 かおり、共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討、心理学研究、84:1、2013、20-27

[学会発表](計15件)

木村 英樹、感情と感覚の構文論、中国語学講演会、2016年2月20日、二松学舎大学(東京都・千代田区)

西村 義樹、多義の实在論はどこまで擁護可能か? : 認知言語学の多義研究が進むべき道、早稲田大学言語学シンポジウム2015「多義の言語学と哲学」(招待講演)、2015年12月12日、早稲田大学文学学術院(東京・新宿区)

西村 義樹、語彙、文法、好まれる言い回し：認知文法の視点、東京外国語大学日本研究センター対照日本語部門・国際日本語教育部門共催第17回研究会「外国語と日本語との対照言語学的研究」(招待講演)、2015年12月5日、東京外国語大学(東京・府中市)

西村 義樹、文法と意味：認知言語学の視点、認知言語学フォーラム2015(招待講演)、2015年7月4日、北海道大学(北海道・札幌市)

西村 義樹、認知言語学と日本語研究、日本語学会2014年度秋季大会(招待講演)2014

年 10 月 18 日・19 日、北海道大学 (北海道・札幌市)

林 徹、Eynu, a Modern Uyghur-based secret language, and its implications in Turkic linguistics、17th International Conference on Turkish Linguistics (招待講演) 2014 年 9 月 3 日~5 日、Universite de Rouen (フランス・ルーアン)

渡辺 匠・櫻井 良祐・唐沢 かおり、Determined to look cool: Disbelief in tree will increases socially disirable responding、28th International Congress of Applied Psychology、2014 年 7 月 8 日~13 日、Palais des Congres (フランス・パリ)

西村 義樹、認知文法の言語観と方法論、関西言語学会第 39 回大会 (招待講演) 2014 年 6 月 14 日・15 日、大阪大学 (大阪・豊中市)

Pfaff, Carol W., Isil Erduyan, 林 徹、Development in Turkish varieties and identities in North Western Europe、2nd International Conference on Heritage/Community Languages、2014 年 3 月 7 日・8 日、UCLA (合衆国・ロサンゼルス)

西村 義樹、日英語のヴォイス現象: 認知文法の視点、日本英語学会 (招待講演) 2013 年 11 月 10 日、福岡大学 (福岡・福岡市)

木村 英樹、'Referentiality' と 'Reality': モノ・サマ・コトの現実性と有標化をめぐる問題、日本中国語学会第 63 回全国大会 (招待講演) 2013 年 10 月 26 日、東京外国語大学 (東京・府中市)

木村 英樹、視点と表現、第 5 回日中対比言語学シンポジウム (招待講演) 2013 年 8 月 21 日、福建師範大学 (中国・福州)

西村 義樹、英語学者が認知言語学を研究するわけ、日本フランス語学会 (招待講演) 2013 年 6 月 1 日、国際基督教大学 (東京・三鷹市)

林 徹、Su or bu/o: Turkish demonstratives with concrete referents、16th International Conference on Turkish Linguistics、2012 年 9 月 18 日~20 日、Middle East Technical University (トルコ・アンカラ)

木村 英樹、中国語の知覚・感覚・感情表現、日本言語学会 (招待講演) 2012 年 6 月 16 日、東京外国語大学 (東京都・府中市)

林 徹、Linguistic creativity in a

secret language of a minority in Xinjiang、Colloque international: Littérature et politique dans le monde turc (招待講演) 2012 年 6 月 14 日・15 日、INALCO (フランス・パリ)

〔図書〕(計 件)

藤田 耕司・西村 義樹 (編)、開拓社、日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ: 生成文法・認知言語学と日本語学、2016 (5 月刊行予定)

西村 義樹・斎藤 純男・田口 善久 (編)、三省堂、明解言語学辞典、2015、258

鍛治 広真・アクマタリエヴァ ジャクシルク・林 徹 (編)、東京大学文学部言語学研究室、キルギス語基礎語彙集: 言語調査実習の報告、2015、xvii+146

唐沢 かおり・林 徹 (編)、東京大学出版会、人文知 1: 心と言葉の迷宮、2014、240

西村 義樹、東京大学出版会、心・言語・文法: 認知言語学の視点 (唐沢かおり・林徹編『人文知 1: 心と言葉の迷宮』) 2014、51 - 69

西村 義樹・野矢 茂樹、中央公論社、言語学の教室: 哲学者と学ぶ認知言語学、2013、233

林 徹、白水社、トルコ語文法ハンドブック、2013、272

木村 英樹、白帝社、中国語の意味とかたち: 「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究、2012、347

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 義樹 (NISHIMURA, Yoshiki)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 20218209

(2) 研究分担者

木村 英樹 (KIMURA, Hideki)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 20153207

林 徹 (HAYASI, Tooru)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 20173015

唐沢 かおり (KARASAWA, Kaori)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 50249348